

日蓮聖人の三世観

奥野本洋

日蓮聖人は、ご自身の生涯を考えられるとき、この世に生を受け、生死輪廻を繰り返してきたが、未だ仏法の為、法華経の為には、その生命を一度も捨てずという思いと、誹謗正法の罪を反省する強い思いがそこにはあったと思われる。誹謗正法の罪を消すことと流罪死罪にあうことの関連性を考えていく時、過去・現在・未来の三世にわたる日蓮聖人ご自身の身の上が浮かびあがってくる。

現代とはちがひ、大聖人の生活された鎌倉時代には「後世をおもう」ことは重大な問題であり、だれもが関心をいだくところであつた。日蓮聖人も大きな関心をもっていたにちがひない。現代は、医学の発達により内臓移植も行なわれる時代であり、日一日と科学の進歩は目をみはるものがあるが、今日もなお「後世をおもう」事は最重要問題であると思う。私は以前『棲神』に、僧侶は檀信徒の葬儀を行ない引導をわたしているが、自分自身の死について真剣に考えているのだろうかということを書いたことがある。自身の死について真剣に考え、真剣に生きるところに、日蓮聖人が体得された永遠の生命を感じることが出来るのではないだろうか。日蓮聖人の遺文中から、その三世観を考えてみたい。

一、無常と六道輪廻

まず、持妙法華問答鈔中に、この世の無常について次のようにある。

昨日が今日になり、去年の今年となる事も、是期する処の余命にはあらざるをや。……臨終已に今にありとは知ながら、我慢偏執名聞利養に著して妙法を唱へ奉らざらん事は、志の程無下にかひなし……思へば一夜のかりの宿を忘れて幾くの名利をか得ん。(P二八三)

ここで聖人は、今生に生を受けながらつまらぬ事に執著し、大事なことを忘れていると警告し、「須く心を一にして南無妙法蓮華經と我も唱へ、他をも勸んのみこそ、今生人界の思出なるべし」(P二八五)と眞の生きがいについてふれられる。聖愚問答鈔上には、生死無常について、

夫生を受しより死を免れざる理りは、賢き御門より卑き民に至るまで人ごとには是を知といへども、實に是を大事とし是を歎く者は、千万人に一人も有がたし、……我等無始より已來、無明の酒に酔て六道四聖に輪廻して、或時は焦熱大焦熱の炎にむせび、或時は紅蓮大紅蓮の氷にとぢられ、……今度苦生死のきづなをきらず、三界の籠樊を出さざらん事かなしかるべし……(P三五〇)

と生死輪廻の繰りかえしをここで断ち切るべきだと述べられ、「吾最第一の法を知れり」(P三五二)とその輪廻を断ちきる術を心得ているといわれる。

おもうに、このはかない生命を妻子眷族の為には捨てても仏法の為、法ヶ經の為にかけたことがあったらうかとふりかえってみるに、

夫一劫受生の骨は山よりも高けれども、仏法の為にはいまだ一骨をもすてず。多生恩愛の涙は海よりも深けれども、尚後世の為には一滴をも落さず。(P三八一 聖愚問答鈔下)

とある。日蓮聖人の生き方、生涯を通しての方針が語られているのが次の御書ではないかと思う。

世間に人の恐るゝ者は火炎の中と刀劍の影と此身の死するとなるべし。牛馬猶身を惜む。況や人身をや。癩人猶命を惜む。何況壯人をや。……身命を捨る人他の宝を仏法に惜べしや。……世間の浅事には身命を失へども、大事の仏法などには捨る事難し。故に仏になる人もなかるべし。(P六一一 佐渡御書)

はかない生命であるが、かけがえない身命である。その何にもかえがたい身命をつまらぬ事につかうのではなく、本当に尊い事に用いることが、一大事といわれるのである。

余命いくばくならず。いたづらに曠野にすてん身を、同は一乘法華のかたになげて(P四五九 金吾殿御返事)とも言われた。本当に尊いことの為とは、法華経の為に命をかけることであると聖人は考えられた。

夫無始の生死を留めて、此度決定して無上菩提を証せんと思はば、すべからく衆生本有の妙理を観ずべし。衆生本有の妙理とは妙法蓮華経是也。(P四二 一生成仏鈔)

と述べられているし、船守弥三三郎許御書中には、

我等衆生無始よりこのかた生死海の中にありしが、法華経の行者となりて無始色心本是理性、妙境妙智金剛不滅の仏身とならん事、あにかの仏にかわるべきや。過去久遠五百塵点のそのかみ、唯我一人の教主釈尊とは我等衆生の事なり。(P二三〇)

といわれる。

日蓮聖人の三世観（奥野）

無常観を考え、生死輪廻の縛から離れると教えるのは、日蓮聖人一人ではなく、仏教界の中には、種々の教えがあった。しかし、それらは仏教の外道学であり、それ故に、このような濁世の時代になってしまったと嘆かれる。

然れば仏道を習ふといへども、心性を観ぜざれば全く生死を離るゝ事なきなり（四三 一生成仏鈔）と述べ、心の目を開く教えでなくてはならないといわれるのである。

二、立正安国論の事

日蓮聖人は、「守護国家論」に引続き、「立正安国論」を書かれ、北条時頼に上申に及ぶことになる。その内容は、「世がみな正法にそむき、人悉く悪法に帰している為に、善神が国を捨て、種々の災難が続出しているのだ」というものであった。そしてその悪法の根源が、とりもなおさず法然の念仏であった。善無畏三蔵鈔には。

当世はことに善導法然等が邪義を正義と思^てて浄土の三部経を指南とする故に、十造る寺は八九は阿弥陀仏を本尊とす。在家出家一家十家百家千家にいたるまで持仏堂の仏は阿弥陀也。（P四六九）

と示され、日本国中の信仰が阿弥陀仏中心になっていっていることを嘆かれている。そして、まずはその念仏宗を諫暁することが第一と考えられた。一谷入道御書には、

阿弥陀仏は十^十万億のあなたに有て、此娑婆世界には一分も縁なし。……但日蓮一人計此事を知りぬ。命を惜て云はずば国恩を報ぜぬ上、教主积尊の御敵となるべし。是を恐れずして有のままに申^ならば死罪となるべし。

（P九九三）

と述べられている。又、妙法比丘尼御返事中には、

日本国には誰か法華經と釈迦仏をば謗すべきと疑ふ。……………此日本の国、人ごとに阿弥陀堂をつくり、念仏を申す。其根本を尋れば、道綽禪師、善導和尚、法然上人と申三人の言より出でて候。……………未有一人得者、千中無一、捨閉閣抛等云云。……………ことに法華經と釈迦仏を捨まいらせよとすゝめしかば、やすきまゝに案もなくばらばらと付候ぬ。(P一五五六)

と示してある如く、法然が道綽、善導のまちがった解釈により、聖道門の法華、真言を捨て、閉じ、聞き、抛ての教えを大衆が素直に信じ、正法を誹謗する罪をおのずと作り出しているのだと強く言われるのである。しかし、日蓮聖人の諫暁は、念仏に限ったことではなく、四箇格言にみられるように、禪宗、律宗、真言宗をも責めるのであるが、その中でも真言に対しての批難が強くなっていく。開目鈔中に、

天台真言の学者等、念仏・禪の檀那をへつらい、をつる事、犬の主にををふり、ねづみの猫ををそるるがごとし。……………天台真言の学者等、今生には餓鬼道に墮、後生には阿鼻を招べし。(P六〇七)

と示し、聖道門を学んでいる天台・真言の学者が、何が正しく何が誤っているのかを知りながらも信徒にこびへつらいの態度を示していることを批難しておられる。日蓮聖人の心の中には、最澄が大乗戒壇建立を成し遂げたにもかかわらず、今の比叡山には阿弥陀堂がはびこり、伝教大師のお考えからそれた信仰がまかり通っている為に、このような世の中になっているのだとの気持が強くあらわれている。撰時抄中には、

法華經に真言すぐれたりと申人は、今生には国をほろぼし家を失ひ、後生にはあび地獄に入べしとはしりて候(P一〇四五)

三三歳祈雨事中には、

日蓮聖人の三世観(奥野)

真言と天台との勝劣に、弘法・慈覚・智証のまどひしによりて、日本国の人々、今生他国にもせめられ、後生にも悪道に墮なり。（P一〇七〇）

と述べられている。そして、高橋入道殿御返事中には、

但皆人のをもひて候は、日蓮をば念仏師と禪と律をそしるとをもひて候。これは物かずにてかずならず。真言宗と申宗がうるわしき日本国の大なる呪咀の悪法なり。（P一〇八八）

と示され、本尊問答鈔にも

然ば日本国中に数十万の寺社あり。皆真言宗也。たまたま法華宗を竝とも真言は主の如く法華は所従の如也。若兼学人も心中は一同に真言也。（P一五八〇）

といわれ、当初念仏を強く責められていた聖人が、後半では真言を第一に責むべき宗であるとされるに至っている。

三、見壞法者置不呵責は墮地獄

日蓮聖人は、衆生本有の妙理は法華経であり、今世の中にはびこるところの念仏はじめ真言に至るまでの諸宗は、正法をそしる教えであることを知った為に、世間に知らせようと辻にも立たれ、幕府をも諷曉されるが、それは、謗法の者を知っていてそれを言わねば自身も墮獄の罪をこうむるといふことを恐れられたのである。高橋入道殿御返事には次のようにみられる。

今日蓮日本国に生て一切経竝に法華経の明鏡をもて、日本国の一切衆生の面に引向たるに寸分もたがわぬ上、仏の記給し天変あり、地天あり。定て此国亡国となるべしとかねてしりしかば、……此事を知りながら身命をを

しみて一切衆生にかたらずば、我が敵たるのみならず、一切衆生の怨敵なり。必阿鼻大城に墮べしと記給へり。
(P一〇八六)

このことは、涅槃經に書かれている事であり、阿仏房尼御前御返事並びに曾谷殿御返事に見壞法者置不呵責の人は仏法中怨であり、無間地獄疑いない大罪の者であることが述べられている。正法をそしめる者は謗法罪で墮獄であり、又、それを知ってだまっている者も同罪にて阿鼻獄へ墮つるといわれるのである。謗法の者を責めることは、ひいては自分の身にも流罪・死罪が競ひおこりくることはまちがいないことである。

四、ご自身の謗法

日蓮聖人自身に謗法の罪がなかったかといえば、聖人は清澄山に登り出家得度した折は、口に念仏を唱えていた一時期があった。現世ばかりでなく過去にもその科、罪はあったはずである。生死一大事血脈鈔中には、

過去に法華經の結縁強盛なる故に、現在に此經を受持す。(P五二三)

とあり、法華經との良い宿縁があったことを述べているが、佐渡御書中には、

日蓮も又かくせめ(責)らるゝも先業なきにあらず。……宿業はかりがたし。……我今度の御勸氣は世間の失一分もなし。偏に先業の重罪を今生に消して、後生の三惡を脱れんずるなるべし。(P六一四)

とあり、又、

日蓮も過去の種子已に謗法の者なれば、今生に念仏者にて数年の間、法華經の行者を見ては未有一人得者若干中無一等等と笑し也。今謗法の醉さめて見れば、酒に醉へる者父母を打て悦しが、醉さめて後歎しが如し。(P六一)

五）

ともいわれるのである。日蓮聖人の一生を動かしたあのエネルギーは、この謗法の罪を強く感じ今生にその罪を消さんが為に生きられたところから出て来ているのではなからうか。若き時代に書かれた頭謗法鈔には、「八大地獄の因果を明し、無間地獄の因果の軽重を明し、……五逆罪より外の罪にて無間地獄に墮ることがあるのかとさぐっていくと、それは誹謗正法の重罪があると述べられている。」（P二五四～五取意）その謗法の重罪をいかに消しさり、後世の墮獄をのがれる為には何をすべきかが聖人の大きな課題であった。

五、身軽法重のこと

聖愚問答鈔には、

汝實に後世を恐れば、身を輕しめ法を重ぜよ。是を以て章安大師云、寧喪^{フトセ}三身命^ヲ、不^レ匿^レ匪^レ教者^ヲ、身軽法重死^レ身弘^レ法。此文の意は身命をばほろぼすとも正法をかくさざれ。其故は身はかるく法はおもし。身をばころすとも法を

ば弘めよと也。（P三八四）

とあり、身軽法重のことが語られている。後世を恐ればとは墮獄をのがれる為にはということであり、その為には身命をおしまぬほどの心をもちなさいということである。この身軽法重の考え方は、日蓮聖人のご生涯を通して持たれたもので、その生き方の根底にいつもあったものと思われる。佐渡御勘気鈔の中で、

本より学文し候し事は仏教をきはめて仏になり、思ある人をもたすけんと思ふ。仏になる道は、必ず身命をすつるほどの事ありてこそ仏にはなり候らめと、をしはからる。既に經文のごとく、惡口罵詈、刀杖瓦礫、教教見損

出と説かれて、かゝるめに値候こそ法華經をよむにて候らめと、いよいよ信心もおこり、後生もたのもしく候。

(P 五二〇〜二一)

と述べられているように、日蓮聖人の生きかた、生きがいというものが、まさに經文にてらされたものであり、周囲の人々はどうか知らぬが、ご自身にとって理想的な生き方が、そこにはあったのではなからうか。さらに開目鈔には、

日本国に此をしれる者、但日蓮一人なり。これを一言も申出すならば父母・兄弟・師匠・国主・王難必来べし。いわずば慈悲なきにたりと思惟するに、法華經・涅槃經等に此二辺を合見るに、いわずわ今生は事なくとも、後生は必無間地獄に墮べし。いうならば三障四魔必競起るべしとしぬ。(P 五五五)

と示され、報恩抄には、

今度命をおしむならば、いつの世にか仏になるべき、又何なる世にか父母師匠をもすくひ奉べきと、ひとへにをもひ切て申始めしかば、案にたがはず、或は所をおひ、或はのり、或はうたれ、或は疵をかうふるほどに……

(P 二二三七)

ともいわれるように、どうすればどうなるという因果関係については日蓮聖人はよくご存知であった。現世に難を受けたくないと思えば正直に知っている事をしゃべらず黙していればいいわけだが、それでは後世が心配である。後世を第一に考えれば、今生には身命をすつるほどの難、苦しみがそこにはあらわれるはずである。そこで法にてらしあわせての行動をとられたわけである。秋元御書中に、「過去遠々劫より今に仏に成らざりける事は、加様の事に恐て云出さざりける故也。」(P 一七三八)と言われるが、今回、「我不愛身命但惜無上道、身輕法重死身弘法」の精神

で生きなければ、又前世に体験しているように生死輪廻の糸をたち切れないのであろう。

六、現世安穩・後生善処

開目鈔の最後のお言葉に次下の如く述べられている。

日蓮が流罪今生小苦なればなげかしからず。後世には大楽をうくべければ大に悦し。（P六〇九）

今生の流罪・死罪は大難であるはずであるが、後生の事を考える時、それは小苦であるといわれる。来世のよろこびを得るには、今生に過去謗法の罪等を消さねばならぬの意識が強くあらわれている。そして、今生の値難さえも苦とは考えない心がまえをもたれている。祈禱經送状には、

付_レ其法華經の行者は信心に無_レ退_レ轉_レ身_レ無_レ詐_レ親_レ一切法華經に任_レ其_レ身_レ如_レ金_レ言_レ修_レ行_レせば、隨_レに後生は不_レ及_レ申_レ今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布之大願をも可_レ成就_レ也。（P六八九）

日蓮聖人にとって、後世のことを考えることは現世とは切っても切れないことなのである。後世は現世にありと考えられるのである。呵責謗法滅罪鈔に、

過去の謗法、我身にある事疑_レなし。此罪を今生に消さずば、未來争_レか地獄の苦をば免るべき。過去遠遠の重罪をば何にしてか皆集_レて、今生に消滅して、未來の大苦を免れんと勘_レしに……日蓮を怨み、或は頭を刎、或は流罪に行ふべし。度度かゝる事出来せば無量劫の重罪一生の内に消_レなんと謀_レたる大術（P七八〇〜一）

といわれるように、重罪をこの一生の内に消したいというのが聖人の願いであり、今生を生きたという思い出になるのであろう。その想い出は、ただ単に生きたということではなく、釈尊の因行果徳を自然に譲り受けるという即身成

仏の教えを自身がこころみられ、後の世の我々に残されたのである。

即身成仏と申法門は、世流布の学者は皆一大事とたしなみ申事にて候ぞ。就中、子が門弟は万事をさしをきて此一事に可留心也。建長五年より今弘安三年に至るまで二十七年の間、在々処々にして申宣たる法門繁多なりといへども、所詮は只此の一途也。(P一七九六妙一女御返事)

といわれる。此の一途即ち即身成仏の法門は、墮獄の道をふさぐ法門であり、如説修行鈔でいう「今生には不祥の災難を払ひ長生の術を得」(P七三三)の現世安穩の教えなのである。四条金吾殿御返事には、

法華經を持奉より外に遊樂はなし。現世安穩・後生善処とは是なり(P一一八一)とある。

川添昭二氏はその著『日蓮』の中で、「日蓮は求法と護法がもっともきびしく交錯するところに、その命をおいていたのである。死を睹した謗法断罪の戦鬪的宗教者の姿がここにあった」と述べられているが、権力等にもおしげず、正法流布に命をささげられたその生涯は、過去・現在・未来の三世をすべて、お見通しであったのだから。撰時抄に云く、

外典云、未萌をしるを聖人という。内典云、三世を知を聖人という(P一〇五三)
日蓮聖人が三世をすべて知っていたというのは、それは「釈迦如来の御神我身に入かわらせ給けるにや。我が身ながらも悦び身にあまる。(P一〇五四)ということがあればこそ出来たことなのだろう。

◎()内頁は昭和定本遺文を示す。

〔註〕

(1) 同じような表現が次の御書にもみられる。聖恩問答鈔上P三五八には「朝有紅顏、誇世路、夕為白骨、郊原」、聖恩問答鈔下P三八五には、「悲哉、生者必滅の習なれば、設ひ長寿を得たりとも、終には無常をのがるべからず。今世は百年の内外の程を思へば夢の中の夢也。非想の八万歳未、免無常。切利の一千年も猶退没の風に破らる。況や人間閻浮の習は、露よりもあやうく、芭蕉よりもろく、泡沫よりもあだ也。……若此道理を得ば後世を一大事とせよ。」、又、松野殿御返事P一二六八には、「但昼夜に今生の貯をのみ思ひ、朝夕に現世の業をのみなして、仏をも敬はず、法をも倍せず。無行無智にして徒らに明し暮して、閻魔の庁庭に引迎へられん時は、何を以てか資糧として三界の長途を行き、……」とある。

(2) 大井莊司入道御書P一二四三には、「如是捨置一劫が間の身骨は、須弥山よりも高、大地よりも厚かるべし。惜き身なれども、云に甲斐なく奪れてこそ候しか。然ば今度為法華經、身を捨、命をも奪れたらば、無量無教劫の間の思ひ出なるべし、と思ひ切給べし。」とある。

(3) 守護国家論P九〇に、「予歎、此事、問造、一卷書、願、選撰集、謗法、緣起、名号、守護国家論。」とある。

(4) 阿仏房尼御前御返事P一一〇八、九には、「涅槃經云、若善比丘見、壞法者、置不阿責、驅遣、擧処。是、我弟子、真声聞云云、此經文にせめられ奉て、日蓮は種種の大難に値といへども、仏法中怨のいましめを免んために申也。」、曾谷殿御返事P一二五四には、「涅槃經云、若善比丘、見、壞法者、置不阿責、驅遣、擧処。是、我弟子、真声聞也云云。此文の中に見壞法者の見と、置不阿責の置とを、能々心腑に可染也。法華經の敵を見ながら置てせめずんば、師檀ともに無間地獄は疑なかるべし。」とある。

(5) 種種御振舞御書P九六二には、「わずかの小島のぬしら（主等）がどさんかを、をち（恐）ては閻魔王のせめ（責）をばい、かんがすべき。」とあり、弥源太入道殿御消息P一五四九には、「恐れて不云。是は今生を重して後生は軽する故也。されば現身に彼寺の故に亡國すべき事当りぬ。日蓮は度々知て日本国の道俗の科を申せば、是は今生の禍、後生の福也。」とある。

(6) 清水書院『日蓮』P八三

(7) 聖人知三世事P八四二「聖人と申は委細知三世、云聖人。儒家三皇・五帝並三聖、但知現在、不知過去。外道知過去八万・未來八万。一分聖人也。小乘二乘過去未來知因果。勝於外道聖人也。小乘菩薩過去三僧祇劫。通教菩薩過去經三

歴劫摩羅劫。別教菩薩一位中多俱低劫知過去。法華經迹門過去演說三千塵点劫。一代超過是也。本門五百塵点劫。過去遼遠劫演說之又宣傳未來無數劫事依之案之案知過去聖人本也。」とある。